論　文　ニダバ（*Nidaba*）48(2019), 41-49

現代中国語における日本語からの借用語の基本語化

－“宅”の考察を通じて－

呂　　雨　　珊

1. はじめに

まずは、「基本語化」の概念については、金愛蘭（2008）は次のように述べた。

「基本語彙」とは、一定の言語使用領域において高頻度・広範囲に用いられる単語の集合であり、そのような基本語彙の要素である単語を「基本語」と言うならば、単語が基本語彙の仲間入りをするという現象は、「基本語化」と呼ぶことができる。

本発表は先行研究を踏まえながら、2000年以降、主に現代中国語の新語における日本語からの借用語の最も代表的な例である「宅」の使用状況や基本語化の過程を全面的に把握することを通じて、現代中国語、特に2000年以降中国語に流入した借用語の全体像を明らかすることを目的とする。

2.「宅」の意味記述

2.1 中国語における「宅」の意味記述

「宅」の概念及び多義的意味拡張を明らかにするために、ここでは、「古代汉语词典（古代漢語詞典）」（商務印書館　2003）と「現代汉语词典　第六版（現代漢語詞典　第6版）」（商務印書館　2001）の二冊における意味記述を取り上げる。

まず、古典中国語における「宅」の解釈は以下の通りである。

（以下、日本語は全て筆者訳）

①住所、住居。

例：武帝末，鲁共王坏孔子宅，欲以广其宫。《汉书・艺文志》

訳：漢武帝末期、魯共王（劉余）は孔子の住居を取り壊し、其の宮殿を広げようとした。

② 住む。居住する。

例：分明羲仲，宅嵎夷。《尚书・尧典》

訳：（帝は）羲仲に命じ嵎夷（地名）に宅せしむ。

③ある地位にある。

例：朕宅帝位三十有三载。《尚书・大禹谟》

訳：朕は帝位につき、既に三十三年となった。
④ある官職に就く。
例：有能奋庸熙帝之载，使宅百揆。《尚书・舜典》
訳：発奮努力し、帝の功績を発揚する人物がいれば、百揆（殷周時代の官職の一種）に就かせる。
⑤従う。
例：亦惟助王宅天命，作新民。《尚书・康诰》
訳：王を補佐し、天命に従うべき、（殷の国民を）新たな国民に進化させる。

次に、現代中国語における「宅」は主に以下の解釈がある。
①住所、住居。
例：深宅大院
訳：大きな屋敷
②家に引きこもる。
例：你也出去走走，别总宅在家里。
訳：あなたも外で遊んでみて、いつも家に引きこもらないようにしなさい。

「现代汉语词典　第五版（現代漢語詞典　第5版）」（2005）には「宅」に関する6語が収録されている。
①宅第：書き言葉。住宅（大きな屋敷）
②宅基：建物の土台
③宅基地：中国の法律により、国民が居住のため、合法的に公有地から取得する土地のこと。
④宅门：意味1　大きな屋敷の扉　意味2　大きな屋敷に住む人を指す
⑤宅院：庭付きの屋敷
⑥宅子：話し言葉。住宅

一方、2012年「现代汉语词典　第六版（現代漢語詞典　第6版）」には「宅」に関する語が、第五版に収録された語のほか、新語として新たに三つ収録された。
⑦宅急送：宅配便サービスの一種。郵便物や荷物を配送するサービスが提供される。（語源：日本語の「宅急便」）
⑧宅男：電子ゲームやマンガに熱中するため、家に引きこもる男。
⑨宅女：家に引きこもる女。

以上のような項目や定義をまとめると、古典中国語と現代中国語に関らず、「宅」という語の本来の意味は「住所」という意味である。古典中国語では「住む」「ある地位にある」「官職に就く」「従う」などの意味にまで拡張された。一方、現代中国語では、少なくとも2005年までに主に「住所」として幅広く使われていた。その後、「家に引きこもる」という意味が民間で使用され、2012年「现代汉语词典　第六版」が出版された時点では「家に引

きこもる」という意味で公的に承認された。

2.2 日本語における「お宅」の意味記述

広辞苑[1]では、「お宅」の解釈は以下の通りである。

①相手の家の尊敬語

②相手の夫の尊敬語

③相手または相手方の尊敬語

④特定の分野・物事にしか関心がなく、その事には異常なほどくわしいが、社会的な常識には欠ける人。仲間内で相手を「御宅」と呼ぶ傾向に着目しての称。

更に、「大辞泉」では、「お宅」とは「あることに熱中していること。また熱中している人」、1980年代半ばから使われ始めた言葉である。初めは仲間内で相手に対して「おたく」と呼びかけていたところからという。特定の分野だけに詳しく、そのほかの知識や社会性に欠ける人物をいうことが多い。

以上を総合すれば、日本語においても、中国語においても、「宅」の最も基本的な意味は住所という名詞的な意味であり、その後、他の意味に次第に拡張されたことが分かる。

3. 現代中国語の新語における「宅」の使用状況

新語の「宅」は中国語で“zhái”と発音され、日本語の「御宅」を語源とする語である。日本語と比べ、中国語における「宅」という語の意味のみならず、品詞性も変わっている。

3.1 準接辞的用法

「準接辞」の概念について、山下（2013）は二字熟語が基になって、語頭または語尾に漢字形態素を添えるもので、このような位置にある形態を準接辞と定義づけている。「宅」は「御宅」から抽出された形態素であるため、さらに新たな複合語や派生語を作ることができる。準接辞としての「宅」には以下の二つの用法がある。

まずは「宅＋○○」という用法がある。例えば、「宅男」、「宅女」、「宅文化」など新たな造語が出てきた。以下は新聞における「宅」の使用例である。

例１： 宅男由于整日宅在家里，对于游泳这件事实在是不感冒。

（騰迅遊戯　2014.10.13）

（訳：宅男は一日中ずっと家に居るため、水泳にはどうにも興味がない）

例２：女孩子一定要经常旅行，不能做宅女。

（北青網　2017.10.13）

（訳：女の子は宅女にならないで、よく旅に出なさい。）

上記２語は新聞記事の見出しにある例である。「宅男」はよく家に引きこもり、あまり外に出ない男性を指し、「宅女」はよく家に引きこもる女性であるという意味に使われている。

「宅」は日本語の「オタク」(自分の好きな事柄や興味のある分野に、極端に傾倒する人を指す) を経て、「家またはある場所にずっと居るのが好きだ、またはそのような者」を表すようになった。

「宅男」、「宅女」のような“準接頭辞”の用法のほか、「〇〇宅」の用法もある。下記のような「技术宅」(科技宅ともいい、ネットで科学技術に興味があり、しかも特別な技能を持つ人を指す) という語はその例の一つである。

例 3：这些年轻的“技术宅”，都是重庆大学“智能汽车协会”的会员。

(重慶晨報　2017.08.30)

(訳：これらの若い“技術宅”は、みんな重慶大学“知能自動車協会”のメンバーである。)

例 3 のように名詞の「技術」の後ろに置き、“準接尾辞”としても使用されている。さらに、ここの「宅」は「家またはある場所に引きこもる」という意味が薄くなり、「ある分野に通暁している人」という意味になった。

まとめてみると、「宅」は新語として主に①家またはある場所に引きこもる。という意味が使われる一方、②ある分野に通暁しているという意味もある。一方、「宅」はまだ文法化し切れていないので、「準接辞」と位置づけられているのである[2]。宅は造語力が強い名詞性準接辞として数多く新語を作り出すので、日常的に使われるようになった。

3.2 動詞化と形容詞化

前述のように、現代中国語における「宅」は主に準接辞として使われるほかに、動詞としても用いられるようになった。「(家の中などに) 引きこもる」という意味を表す。

例 4：城市孩子总宅在家里，体质呈逐年滑坡趋势便不足为奇。

(人民日報　2013.07.06)

(訳：都市の子供たちはいつも家にこもっているため、体格が年を追って劣っていくことが珍しくない)

例 5：大学生，你为什么要宅在宿舍里？这样宅下去，真的好嘛？

(搜狐新聞　2017.10.11)

(訳：大学生はなぜ寮に引きこもるのか。このままだと本当に良いのか。)

また、「宅」は形容詞としても使用されている。

例 6：平时很宅，我出门都会自己带一个保温杯，里面装着凉茶。

(華夏経緯網　2017.09.19)

(訳：私は普段あまり外出しない。いつも出かけると、必ず漢方茶の入った水筒を持ち歩いている。)

したがって、現代中国語における「宅」は日本語のある事に過度に熱中していること。また、熱中している人」という意味が次第に薄れ、「家またはある場所に引きこもる」との

意味になった。さらに準接辞から動詞、形容詞まで使用範囲が拡大し、基本語化しつつあると考えられる。

4. 現代中国語における「宅」に関する意味拡張の過程

「お宅」という語は日本語では「相手の家→相手→あることに熱中する人」を表す。一方、現代中国語では、「宅」の意味が単純で、「住所」を表す。しかし、近年、日本の「お宅」文化により、「御宅族」という言い方が表れた。その後、中国語において次第に消化・吸収され、日本語における「お宅」の本来の意味が薄れてくる。その結果、「宅」の意味は「家に引きこもる」などに拡張された。その拡張過程は以下の図1のようである。

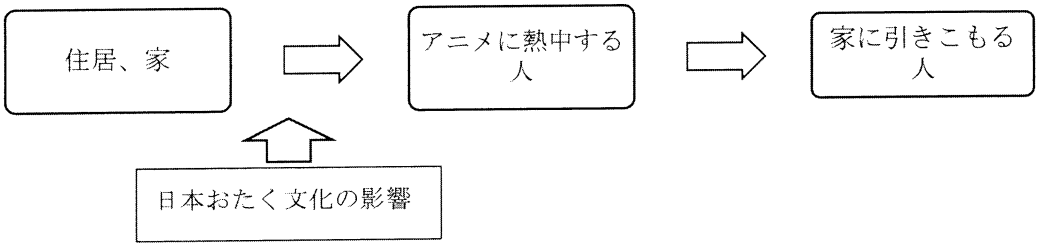

図　1

近年、「宅」に関する新語は新聞雑誌、ニュースなどのメディアで多く現れ、日常生活でも頻繁に用いられるようになった。例えば、宅文化（御宅文化）、宅时尚（宅ファッション）、游戏宅（ゲーム御宅）などである。これらの語は「宅」を語源として形成された新語である。筆者はCNKI[3]を利用し、現時点（2018年8月28日）における新聞記事での「宅」に関する新語の使用状況について調べた。

キーワード	検索件数	最初に使用された新聞名	最初に使用された日付
宅男	1746	中国计算机报	2006年9月27日
宅女	988	中国新闻出版报	2007年11月28日
御宅	135	亚太经济时报	2005年2月4日

以上のデータによると、「宅」に関する新語が最初に使用されたのは「御宅」という形式である。「御宅」という語が具体的にいつ頃から中国語で使われ始めたのかを遡って探ることは困難であるが、最初の正式な出典は2005年中国大陸の新聞記事であり、その最も古い用例は以下の2005年2月4日号の「亚太经济时报」中に見出される。

例7：“御宅族”通常被译为极客（geek）或狂热爱好者，指那些对某样东西痴迷到影响自己社会生活的人

（訳：「御宅族」は通常「ギーク」または「マニア」と訳され、社会生活に支障が出るほどあるものに熱中する人を指す。）

一方、「宅男」という語は2006年9月27日号の「中国计算机报」の新聞記事に初めて現れ、「御宅」の使用よりやや遅いにもかかわらず、用例数は1746件であり、「宅」に関する新語の中で最も多く使用されている。「御宅」は元々日本語に由来する「御宅」の「借形語」である一方、「宅男」という語は日本語の「御宅」から影響を受け、新しく作られた「宅」に関する新語であることが分かる。

5.「宅」は中国語における基本語化の要因

鈴木（2002）、（2003）は借用語の成立事情を「社会・文化的要因」と「言語・心理的成立」に言及した。本発表ではその研究を参考しながら分析する。

5.1 社会・文化的要因

山本（1982）[4]が指摘したように、言語は文化の凝縮であり、文化と密接に関連している。文化の流入に伴い、当然言語の接触も生じる。…必ずしも地域的に近いことが絶対条件ではなく、通信技術の発達により、文化的に優位な価値を持つ言語の語が文化に関する語彙を中心に借用されるようになる[5]。

日本は経済・文化大国として知られており、ACG産業（アニメ、コミック、ゲーム）をはじめ、映画、ドラマ、音楽などあらゆる領域にわたり、世界の先端を歩んでいる。特に、アニメを代表とするACG産業は日本のソフトパワーの象徴としてその作品は世界中に発信されている。2000年以降、メディア技術の発達やインターネットの普及により、伝統的なメディアであるテレビの代わりに、視聴ツールも多様になった。したがって、日本は世界に誇るアニメ大国としてアニメ文化の発信とともに、それに関連する語彙も他の国に供給している。

このように、ACG 文化を代表とする日本文化の受容により、中国の若者の言葉様式は大きく変化した。インターネットの普及は文化交流を促進するとともに、文化のシンボルである言葉にも浸透する。「宅」はその典型的な例である。

2004年台湾では「電車男」という小説により、オタクの大ブームが起こった。「御宅族」という語は2005年中国大陸の新聞記事に使われるようになった。また、「21世纪华语新词语词典（21世紀中国語新語辞典）」（2007）の解釈によれば、「御宅」とは「沉溺于新事物的人（新しい物事に耽る人）」、更に「香港、台湾やシンガポールでは多く使用されている」[6]となっている。したがって、「御宅」という語は中国大陸より香港、台湾等の地域で先に使用されたことが証明可能である。そう考えた場合、「御宅」という語は「住所」から意味が拡張され、最初に「アニメなどの物事に熱中する人」という意味を表し、その後、「御宅男」という言い方から「宅男」へ簡略化され、まず台湾で使用され、その後、中国全土で

広く使われるようになったと推測することができる。

5.2 言語・心理的成立要因

2000 年以降の日本語借用語の伝播は主に若者層によって行われている。その原因はまとめてみると、まず、若者層は外来文化に対してもっと寛容な態度を取っている。そのゆえ、他の年齢層より異なる文化を受け入れやすいため、文化の象徴である言語を自然に受容した。次は若者層が流行を追いかける心理がその原因である。王暁（2009）は、若者層は目立ちたがる心理的作用によって、彼らはあえて外国語語彙を使用することがあると述べている。それは必然的に日本語借用語の流入条件を作った。「オタク」という呼称は 1970 年代に誕生した。元々サブカルチャーのファンをさす。1980 年代にこの言葉は普通とは見なされない趣味を持つ人、社交性に欠ける人に対しても使われるようになった。岡田（2000）によれば、「オタク」という語は 1990 年代頃からは否定的な意味は薄れ、肯定的に用いられるようになったという。「御宅」が中国語に借り入れられた最初は、若者たちを中心とするアニメファンや漫画ファンの間で使われていたが、その後、中国語に次第に消化・吸収され、日本語における「御宅」の本来の意味が薄れてくる。

社会文化的要因と心理的要因のほか、言語的要因もある。

まず、借用の定義を見てみる。借用は他の言語からそれまで自国語になかった要素を取り入れる。つまり、新しい要素を受容するのが借用語の最も重要な役割である。それは今日でも変わらない。2000 年以降、インターネットを通じ、新しい情報や概念が途切れなく入ってきた。人々の言語交流の増加により、既存の表現は既に人々の需要を満たせなかった。したがって、日本語借用語の受容を通じ、中国語の語彙表現を豊かにする。

古典中国語にせよ、現代中国語にせよ、「宅」という語は古来、「家、住居」として用いられていた。本来、中国語では「家に引きこもる」は「窝在家里」というような表現があるが、「宅」の新しい意味を使うことによって、中国語の表現力を更に豊富にした。

6. まとめ

本発表では、現代中国語の新語における日本語からの借用語の代表例である「宅」という語を対象として使用状況や意味拡張を分析し、基本語化の要因を分析した。「宅」は元々「住所」を意味する一方、近年日本語の「お宅」の影響により、「家に引きこもる」に拡張された。また、「宅」という語は本来の名詞として用いられるのみならず、動詞や形容詞としても用いられるようになっている。さらに準接辞としての用法もある。また、「宅」の基本語化の要因に関しては、主に社会・文化的、言語・心理的な要因があると考えられる。

今後は、実際のデータに基づいて更に借用語の使用状況を把握し、現代中国語の新語における日本語借用語の基本語化について理論的な研究を進めていくつもりである。

注：

⑴『広辞苑』第六版（2008）新村出編　P400

⑵ 呂衛清・駱婉婷（2015）「現代中国語にみられる日本語由来の外来語 ：“控”の基本語化に関する一考察」

⑶ CNKI（中国学術情報サービス）は中国で発行されている学術雑誌や重要な新聞、学位論文各種国際学会論文集などの文献がインターネットを利用して閲覧できるサービスである。

⑷ 山本七平（1982）「日本人と外国語」『国際交流と言語文化』企業内語学教育研究会編

⑸『応用言語学詞典』P331

⑹『21 世紀華語新詞語詞典』(2007)　復旦大学出版社

参考文献

辞書類

日本語

『広辞苑』第六版（2008）　新村出編

『大辞泉』小学館

『応用言語学辞典』(2012)　研究社

中国語

『現代漢語詞典』第六版（2012）　商務印書館

『古代漢語詞典』(2003)　商務印書館

『21 世紀華語新詞語詞典』(2007)　復旦大学出版社

単行本

沈国威（1994)『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』　笠間書院内田慶市（2010)『文化交渉学と言語接触-中国言語学における周縁からのアプローチー』関西大学出版部

吉村耕治（2008)『現代の東西文化交流の行方-国際化と世界化の光と影-』大阪教育図書株式会社

岡田斗司夫（2000)『オタク学入門』　新潮 OH!文庫

山本七平（1982)「日本人と外国語」『国際交流と言語文化』　企業内語学教育研究会編

高名凱・劉正琰（1958)『現代漢語外来詞研究』　文字改革出版社

譙燕・徐一平・施建軍　(2011)『日源新詞研究』　学苑出版社

論　文

金愛蘭（2008)「基本語化する外来語とその類義語 ：ヒトとヒトとの「トラブル」の場合」『待兼山論叢．日本学篇,』42 巻, 19-36

山下喜代（2013)「現代日本語における漢語接辞研究の概観（大上正美教授退任記念号)」

青山学院大学　青山語文 43, 157-168, 2013-03
鈴木俊二（2002）「借用語の理論-その範囲と社会・文化的要因」国際短期大学紀要第 17 号
鈴木俊二（2003）「借用語の理論-言語・ 心理的成立要因」国際短期大学紀要第 18 号
呂衛清・駱婉婷（2015）「現代中国語にみられる日本語由来の外来語 ： “控”の基本語化に関する一考察」『国文学攷』(227), 1-12, 2015-09 広島大学国語国文学会
張黎（2015）「中国の新語における日本からの借用語について―メディアの使用状況を中心に―」『言語文化論叢』 (9), 31-47, 2015-03-31 千葉大学言語教育センター
譙燕（2015）「グローバル化時代における日中語彙交流 ―中国語に見られる日本語由来の新語を中心に― 」『比較日本学教育研究センター研究年報』 第 11 号
彭広陸（2013）「中国語の新語に見られる日本語からの借用語」（特集 日本と中国ことばの交流）『日本語学』 32(13), 14-25, 2013-11 明治書院
彭広陸（2012）　「中国における中日語彙対照研究の動向　2012」愛知大学中日事典編纂所『日中語彙研究』第二号　(2012)　141-146
團康晃（2013）「「おたく」の概念分析 ――雑誌における「おたく」の使用の初期事例に着目して――」 ソシオロゴス (37), 45-64, 2013
鈴木俊二（1997）「接触言語学から見た日本語の外来語」『紀要』12, 17-53, 国際短期大学
日野資成（2004）「借用語―その条件とタイプ―」『福岡女学院大学紀要』 人文学部編 14, A153-A161,
張予娜（1997）「近代における中日両語の相互浸透性借用語を中心に」『言語文化論叢』 3, 97-113,
松中完二　(2002)「justice の概念認識と多義的使用についての認知的考察」『日本英 語表現学会　第 31 回大会研究発表集』25-30. 日本英語表現学会
曹志偉（2008）「吃 X” 構造における分類と意味の拡張について」　愛知淑徳大学論集　―コミュニケーション学部・心理学研究科篇―　第 9 号　1-10
ビラール イリヤス・姜雪寧（2012）「流行語から見る中国社会の表現の変化」『長野大学紀要』 第 33 巻第 2・3 号合併号
馬麗梅（2015）「中国におけるインターネット流行語の現状と普及の諸要因」言語と文化：愛知大学語学教育研究室紀要 59(32), 95-119 愛知大学語学教育研究室
中国語
王暁（2009）「従語言接触的角度分析当代漢語中借詞」『日語研究与学習』2009 (4) : 10-18
黄藝（2012）「網絡流行的日語語彙研究」『語文学刊』2012 第 12 期（中旬刊）
張亞冰（2010）「“X+女”族新詞語探微」『語文学刊』2010 第 3 期
周剛・吴悦（2003）「二十年来新流行的日源外来詞」『漢語学習』2003 年 第 5 期
曹文静（2011）「従語言接触角度談宅××宅語言現象」　『文教資料』2011 年 6 月